

	[9]
氏 名	眞崎 克彦 <small>まさき かつひこ</small>
博士の専攻分野の名称	博士（外国語教育学）
学位記番号	外博第17号
学位授与の日付	平成28年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	Studies of English Instruction Suited for Elementary School Students' Developmental Stages Using Songs and Chants: Focusing on Prosodic and Emotional Effects
論文審査委員	主査教授 山根 繁 副査教授 竹内 理 副査教授 今井 裕之 専門審査委員教授 石川 圭一（京都女子大学）

## 論文内容の要旨

眞崎克彦氏の博士学位請求論文 *Studies of English Instruction Suited for Elementary School Students' developmental Stages Using Songs and Chants: Focusing on Prosodic and Emotional Effects*（歌とチャンツを利用した小学生の発達段階に適した英語指導の研究：プロソディ効果と感情効果に焦点をあてて）は、5つの実証研究を中核として、以下の構成により全9章から成り立っている。

- 第1章： Introduction（序章）
- 第2章： Literature Review（先行研究の概観）
- 第3章： Effects of Syllable Chants Method (SCM): Study 1（シラブルチャンツ法の効果について：研究1）
- 第4章： Effects of Accent Chants Method (ACM) : Study 2（アクセントチャンツ法の効果について：研究2）
- 第5章： Comparison of Effects of Chants on the Third Graders' Prosody in Sentence: Study 3（チャンツと繰り返しによる練習効果のプロソディ面での比較：研究3）
- 第6章： Comparison of the Chants' Emotional Effects on the Third Graders: Study 4（チャンツ練習と繰り返し練習が3年生児童に与える情意面での効果比較：研究4）
- 第7章： Using Songs in Sixth Graders' English Activity Classes: Study 5（6年生の英語活動クラスにおける歌利用が与える情意面での効果：研究5）

第 8 章: Conclusion (まとめ)

第 9 章: Presentation of a Model Teaching Plan (小学校における英語音声指導のためのカリキュラム案の提示)

References (参考文献, 122 点)

Appendices (A~G) (付録)

小学校では、平成 20 年度の学習指導要領改定を受け、平成 23 年度より「外国語活動」として第 5 学年及び第 6 学年において、それぞれ年間 35 単位時間の外国語活動が必修化された。さらに、2020 年には小学校英語の「教科化」が予定されている。また、文部科学省の現行学習指導要領によると、第 5 学年及び第 6 学年対象の外国語活動の具体的指導内容として「外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと」という記述がある。このような状況下で、現在、小学校の教育現場では英語の歌やチャンツを活用して、発音やリズムを教える取り組みが広く行われるようになった。しかしながら、実践面で発音指導の工夫が進む中、その効果を検証する理論面での裏付けは十分なされているとはいいがたい。本研究のように小学校における英語教育について、特に音声面に焦点を当て、児童の認知発達特性に沿った独自指導法の開発を試みようとした論考は数少ない。さらにその教育的効果や児童の情意面に与える影響について実証的に考察した研究はさらに少ない。

まず、第 1 章では、本研究の位置づけ及び本研究にいたった経緯と本論文の目的について概説している。昭和 61 年(1986 年)に臨時教育審議会が公表した第二次答申を受け、小学校への英語導入が議論され始めて以来、すでに四半世紀以上が経過したが、この章では小学校において、英語教育が導入されるに至った過程と今後の方向性が議論されている。また、本章では小学生の認知発達段階に関して、ピアジェの理論に基づき詳細に記述されている。小学校での「外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむ」という学習目標が、中学校、高等学校へどのように引き継がれていくのかについて、音声指導の重要性の観点から、特に英語の韻律 (prosody) 指導の必要性が説かれている。本章の結びとして、今後の小学校の英語教育の方向性についての示唆、本論文の研究目的、その構成について述べられている。本研究の目的は、1) チャンツや歌の効果を精査し、聴解面、発音面、さらに情意面から、その有効性を検証すること、2) 小学生の発達段階に応じた英語音声教材を開発し、その効果を検証した上で今後の発音指導に寄与することである。

第 2 章では先行研究を踏まえつつ、歌やチャンツを英語の学習指導に取り入れることの効果や価値に関して、学習者の 1) 情意面、2) 記憶保持面、3) 音声学的観点、4) 真正の言語 (authentic language) の学習という、4 つの側面から立体的に考察している。加えて本章では、英語の音節と日本語のモーラの音韻構造上の相違について述べ、日本人学習者が英語を学ぶ際、音声面で困難が

生じる原因を、学習者が音節でなくモーラとして単語の長さを知覚することに起因していると解説している。さらに、韻律面で重要な要素となるアクセント (accent) に関して、日・英語の相違点を、音声学的に詳述している。日本人英語学習者のアクセント知覚が、学習者の母語方言にも影響されることから、本章では東京式アクセントと京阪式アクセントとの違いについても言及されている。これまで、幼児の発達と歌との関連性に関する研究は多くなされているが、思春期前の児童の発達と歌との関係性の調査については、ほとんどなされていないと本章は締めくくられている。

本研究の目的を達成するために、第 2 章では、以下の 3 点の研究課題を掲げている。

- 1) チャンツや歌は、小学生児童の英語発音力向上に役立つか、
- 2) チャンツや歌は、小学生児童の情意面にどのような効果をもたらすことができるか、
- 3) チャンツや歌を英語学習の指導に取り入れる際の留意点は何か。

第 3 章では第 2 章で述べた理論を踏まえ、研究 1 を実施した。実験協力者は 1 年生から 6 年生まで週 1 時間、英語活動を行っている「A 小学校」(兵庫県内国立大学附属小学校) 2 年生、104 名と、「B 小学校」(京都府宇治市内公立小学校) 5 年生の 107 名である。チャンツや歌を用いてシラブル感覚を養う教材を作成し、小学校 2 年生及び 5 年生児童に対して、チャンツや歌を利用した教材の効果の検証を行った。眞崎氏のチャンツを用いたこの音声指導法は「シラブルチャンツ法」(Syllable Chants Method: SCM) と名付けられており、モーラ単位で英語音声を知覚しがちな日本人学習者が、音節単位での知覚が出来ることを目的としている。また、実験に使用した単語は 1 音節語が 15 語、2 音節語は 15 語、3 音節語は 14 語の基本語彙から構成されている。検証は、チャンツ教材とは異なる単語を用いたテストを利用して、SCM 法を実施した事前、事後に行った。SCM 法による効果の判定基準は、シラブル感覚の定着度を指標としている。 $t$  検定およびマクネマー検定による統計的処理の結果、SCM 法は、小学生児童が基本語彙の音節数を正確に判断する能力を養うのに大きな効果があることが明らかになった。しかしながら、すべての単語に効果があるのではなく、分節素の弁別素性を精査した結果、流音 (liquid) を含む単語には効果が表れにくいという点も判明した。さらに、2 年生と 5 年生で学習効果を比較したところ、流音を含む単語の音節数を判定する際に困難を伴う点では、両学年の児童とも同じ傾向を示したが、5 年生では、語彙や各音節の発話長 (duration) 等も考慮に入れ、論理的、分析的に判断している可能性があることが推測できたとしている。

第 4 章では、「アクセントチャンツ法」(Accent Chants Method: ACM) を用いて研究 2 を行っている。ACM 法は、第 3 章で扱った「シラブルチャンツ法」の後継版教材の中で眞崎氏が開発した指導法である。この音声指導では、手の

開閉するジェスチャーを入れながらチャンツ練習することで、児童がアクセント感覚を効果的に養うことを目的にしている。本研究では、研究 1 で「シラブルチャンツ法」の指導を受けた小学校 2 年生と 5 年生の児童に対して、1 年後に ACM 法で実験を行い、その学習効果の検証が行われた。ACM 法による指導に利用したチャンツは、眞崎氏が音楽制作ソフトを使って作成したオリジナルである。ACM 法による発音指導に用いた語彙は、児童の発達段階に応じて収集された 3 音節語から構成されており、第 1 アクセントの位置によってグループ分けされている。分析結果から、ACM 法では、SCM 法ほどは大きな学習効果は得られなかったものの、音声分析ソフトの *Praat* による綿密な音響分析により、第 1 アクセントに「高さ」、「長さ」、「強さ」の 3 要素が揃うと、児童は 3 音節語のアクセント位置を正確に知覚できるようになることが分散分析により統計的に明らかになっている。加えて、アクセント知覚は、母語方言発音の影響を受けやすいため、アクセント位置が、母語と類似していると、正確に知覚しやすいが、母語と異なると混乱する可能性があることが示唆された。児童に対するアクセントの指導は、形式的操作期に入り、論理的な思考、抽象的な思考ができるようになる高学年の方が、低・中学年より適している可能性があると本章を結んでいる。

第 5 章では研究 3 を実施し、チャンツで発音練習した場合とセンテンスをリピート練習した場合とで、文レベルにおいて音声面の指導効果がどのように異なるかについて検証している。実験協力者は、1 年生から 6 年生まで週 1 時間、英語活動を行っている「A 小学校」の 3 年生の 2 クラス、104 名である。チャンツと繰り返し教材の 2 種類を準備し、どちらのクラスにもチャンツで練習する場と、リピート練習する場を設定している。実験教材は、A 小学校のカリキュラムに準拠したものを、アニメーションソフトを利用して眞崎氏が自作した。発音の評価は、第 1 回の指導直後と、第 5 回の指導直後の児童の音声を録音し、音声評価ソフトの *GlobalvoiceCALL* を用いて行った。1) アクセント、2) イントネーション、3) 分節素の 3 項目で評価した結果、チャンツ練習と繰り返し練習とでは、児童の発音力の向上には有意な伸長は見られなかった。この原因は、文レベルでの音声の向上の難しさのほか、授業の中でプロソディに関する取り立てた指導を行わなかったためとしている。

第 6 章と第 7 章では、チャンツや歌の情意面・認知面への効果の検証がなされている。第 6 章では、研究 4 として第 5 章の実験後に、チャンツ練習と繰り返し練習とを比較して、児童が「それぞれの練習をどのように感じているか」について 2 種類の質問紙による調査を行い、その結果を分析している。「質問紙 I」の結果、児童は、チャンツ固有のリズムによって英語を学ぶ楽しさを一層感じるようになり、さらに単語や文を覚えやすくなると感じている一方、チャンツを使うことで必ずしも発音が良くなると考えているとは限らないことなどが判明した。また、上手な英語発音で話すためには、何が大切かを調査した「質

問紙 2」の結果を分散分析による統計処理をしたところ、児童は英語の発音について「調音」や「リズム」を重要であると考えているものの「イントネーション」や「アクセント」については、重要性を認識しているとは限らないことが明らかになった。

第 7 章の研究 5 では、6 年生に歌を使って約 3 ヶ月間にわたり発音指導した場合、児童がどのような意識を持つかに関して調査している。主に「教材として使用する曲の好み」と「情意面での効果」について、A 小学校において 5 段階のリカートスケールによる質問紙調査を実施した。「情意面」、「記憶強化」、「発音の向上」、「真正の言語」の 4 つの観点について児童に自己評価させた結果、高学年の認知的、情緒的な発達段階に合致した音楽を教材として導入することは、英語学習に対する動機づけを高める働きがあることが判明した。歌えるようになりたいという意欲から、文字への関心が高まる傾向があることも分かったとしている。

第 8 章では、第 3 章から第 7 章までの研究に共通した問題点や限界点をふまえ、以上 5 つの実験・調査から得られた結果から、第 2 章で掲げた 3 点の研究課題が十分に検証されたかに関して考察が加えられている。今回の研究から小学校において、チャンツや歌を用いることで 1) 情意面、記憶面、音声面での効果を得ることができる、2) 英語のリズムを分かりやすく指導することが可能になり、さらに児童も英語学習に楽しんで取り組めるため、低学年、中学年から発音指導ができる、3) 児童は、「ことばの面白さや豊かさ」を体験的に学習することができる、などの教育的示唆を行っている。

最終章の第 9 章では、本研究全体を通して得られた知見に鑑みながら、小学校英語の「教科化」を見据えて、小学校における英語音声指導の具体的なカリキュラムが提案されている。

## 論文審査結果の要旨

論文の提出に先立ち、提出要件審査委員会（委員：山根 繁，竹内 理，今井裕之）は、眞崎克彦氏が本研究科の定める「博士論文（課程博士）審査に関する覚書」の論文提出基準を満たしているかどうかを確認した。その結果、同氏は、1) 必要単位（8 単位）を取得済みであり、博士論文のテーマと関連する分野で、2) 論文 3 編（すべて査読あり、うち全国学会誌掲載論文 2 編を含む）、3) 口頭発表 5 回（うち全国大会 4 回）を有し、4) 博士論文聴聞会（平成 27 年 5 月 23 日）も重大な問題の指摘なく終了しており、論文提出のすべての要件を満たしていることを確認したため、研究科委員会（平成 27 年 7 月 22 日開催）に報告し、同氏による論文提出の承認を得た。これを受けて平成 27 年 9 月 28 日に眞崎氏から提出された論文を学位請求論文として受理し、研究科委

員会（平成 27 年 10 月 14 日開催）において承認された論文審査委員会（主査：山根 繁，副査：竹内 理，専門委員：今井裕之，学外委員：石川圭一）での審査に入った。

提出された英文論文（179 頁）は，本報告書「1. 論文内容の要旨」でも述べたように，過去の関連文献の検討を徹底して行っており，References に記された参照論文は 122 編にもものぼる。これらの大量の文献を精査し，小学校における英語音声指導に関わる研究課題を明らかにして実証研究に着手したことは，手堅い研究の手続きとして評価に値する。眞崎克彦氏が，本論でチャンツや歌の効果を実査し，聴解面，発音面，さらに情意面から，その有効性を検証したことは極めて意義深いものと言える。

さらに次の 4 点からも，本学位請求論文は，優れているものと判断することができる。1) チャンツや歌が，小学生児童の英語発音力向上に効果的であることを統計的な手法を用いて実証し，この分野に新しい知見をもたらしたこと，2) 実験音声学の手法を用い研究の実証性を一貫して追及していること，3) 研究の応用性が顕著であり，小学校における英語音声指導のカリキュラムの提案という具体的な教育的示唆へとつながっていること，さらに 4) 博士論文の成果を含んだ小学校英語教育学会，日本児童英語教育学会などでの研究発表が，小学校児童の英語教育の分野で高い評価を受けていること。

以上より，眞崎克彦氏の論文が，研究の方法や内容，記述の体裁や論理など，すべてにおいて高い水準にあり，博士論文としてふさわしいものであることを，論文審査委員会一同が認めた。